

中村武羅夫

島崎藤村氏



島崎藤村氏



七月の某日、浅草新片町に島崎藤村氏を訪うた。

最初訪ねた時は、「春」執筆多忙の故を以て断られ、縁先より直ちに帰った。二度目に訪ねたのは、脱稿後一度磯部温泉より帰られた其翌日である。

縁側から上って茶の間を通り、薄暗い裏梯子を上って二階の書斎へ通された。室は極めて質素な八畳である。文壇の大家の書斎としては、誠にお粗末な室である。

余は、藤村氏を未だ見ぬ以前嫌いであつた。別に理由

はない、其人物が何となく虫が好かぬ、所謂毛嫌いなのである。所が、最初会つて後は、猶更に嫌いになつた。

客に接して、恐らく藤村氏ぐらい、己を巧みに欺く人は少なからう。会つた其態度が、如何にも謙遜である。而も、それが故とらしい謙遜で厭味だ。今少しさっぱりとした態度になれぬものか。

言葉も謹んで恭々しい迄叮嚀に、人に対する態度も低い。人を恐れるように戦々おどおどして居る。恰度人懐きのせぬ捨猫のごとく、僻みらしい所がある。活々いきいきとした快活な所が些つともない。懐しく接しようとしても恐れるよう



に人を避ける。決して寄せ付けない。寄れば寄る程避ける。継母の手に育った拗ね切った子供と同じである。そして、絶えず用心深く、人の前に少しでも真の我を見せないように、深い注意をして居る。

殊更らしい謙遜の態度と、恐れるような用心深い様子と、此の二つが最初藤村氏に会った時には、堪らなく厭であつた。

余の友にA——某と云う男がある。之れは又馬鹿に藤村の好きな男で、一も藤村、二も藤村、頭の上から足の爪先まで藤村に感服して、其作物其思想、其日常生活、

何から何まで感服して居る、極端な藤村崇拜家である。

余は此の男に会う度びに、「藤村氏の作品には及び難いところがある。然し人間は何うも厭だ」と云うと、A——某は「それは藤村の人物が真に分らないからだ、分って見ると中々好い人だ」と云う。

で、余も「成程、好い人とは思ふ。然し、人物に一種のくさ味がある。何となく毒々しい所がある。然し之れは、本当の藤村氏ではなくて、会ってゆっくり話をして見たら、存外親切な質朴な人だろうとは思えるが、今の所はどうも嫌いだ」と云うのを常として居た。全く余は



藤村氏を虫が好かなかつたのだ。

或時——三度目か四度目——雑誌の用事で、朝早く藤村氏を訪ねた。二三日風邪に冒されて、漸やく今日から床を離れられたとかで、未だ御飯前であつたが、折角来て下すつたのにと云つて室に通された。余は此の日から全く藤村氏を好きになつて了つた。今迄、気取りだとか銜気だとか思つて厭であつた点は、藤村氏の長所であることが分つた。

然う分かつて来ると同時に、余はそれまで、心で憎み、人にも悪く云つたのが、実に恥しくなつて来た。藤村氏

に對して誠に濟まぬ。氣の毒なことをしたと云う念が痛切に自分を責めた。勿論、藤村先生は日本文壇の有数の大家であるから、余の如き何所に何う生きて居るのか居ないのか、其存在さえ分らぬ人間が、好く言つても、悪く云つても、決してびくともされまいし、又其為め藤村氏の名誉、地位、収入に對して、少しの差し障りもあるまいけれども、余は心の中で何となく濟まぬと思つて居る。藤村氏は全く好い人であることを、余は茲に、声を大いにして証明する。

其日、藤村氏と相對したる間は、いろいろなお話を伺

ったり、雑誌の用事を済したり、一時間の余であつた。其間に余は藤村氏が好きになつて了つたのだ。

先きには、気取家、衒気家と思つたが、藤村氏は決して気取つたり、衒つたりする人でない。極く温和な、親切な、物静かな人である、気取ると思つたのも、皆間違いであつた。

一体、藤村氏は、どうも自分を怖れて居る人らしい。絶えず自分を抑えて、自分に克とう克とうと苦心して居る人である。それで、人に対しても、稍々もすれば出よう出ようとする自分を制して、手綱を締めることに心を

用いて居られるのが分る。

余は、藤村氏を、常識家の癖に熱情家を気取る人であると思つたが、それは大間違であつた。正反対であつた。

藤村氏は、真の熱情家であるにも拘わらず、努めて常識家となろうとして居るのだ。自分の狂熱を怖れて、それに克つ可く苦んで居るのだ。狂熱の力を、冷静な智の力で抑圧しようとして居る。自分の狂熱に怖れてそれを抑えようとして居る。藤村氏は、本当の自分を人に見せることが厭やなのだ。何となく不安で、怖ろしいのだ。人に対して妙におずおずしたり、僻みらしいような態度の

見えるのは、それが為めなのだ。藤村氏には、気取ったり、銜ったりする気は毫もない。否、出来ないのだ。気取り銜うには、藤村氏は余りに生真面目きまじめだ。

「春」の主人公岸本が藤村氏自身であることは誰れでも知って居る。其岸本の父が発狂して座敷牢に入られることが同じ「春」の中に書いてある、藤村氏の目を凝つと見入って居ると、普通の人の目色でないことが分る。藤村氏は正しく狂気になる素質を持って生れた人だ。然し、今迄狂気にならなかつたのは、全く此の自制の力ではないかと思う。

藤村氏の人物に対しては、余と同じような感情を持って居る人が多いようだ。然し、それは皆間違つて居る。

藤村氏の人物を知ろうとするには、藤村氏が癡狂の遺伝の為に如何に苦んで、それに打克とうとして居るかと言ふことを解かさなければ、本当の藤村氏は分らない。藤村氏の一言、一句、一挙、一動を其所へ結び付けて考へて見ると、藤村氏の態度を領くことが出来る。

それから、藤村氏は妙な田舎氣質のある人だ。例えば苦しき人々を見ても其中に、遺憾なく藤村氏の美わしい所を現わし、一癖のあるのに気がつくであろう。

藤村氏の人物を一口に云って見れば、真面目な、正直な熱情家である。能く人が、藤村氏は計画のみを大きくして騒ぎ廻る人だと云って笑う。自分は其の所が藤村氏の誠に美しく尊い所だと思う。つまり真面目で正直であるから、傍から見れば、実に馬鹿々々しいことでも、当人は本気で、一生懸命になれるのだ。人は空騒ぎと笑つても、当人に取って見ると、実に真面目な努力なのだ。普通の人の目から見ると、空騒ぎらしいことを、真面目になつて努力の出来るのは、実に羨ましい性格ではないか、自分は斯う云う真面目な、そして正直な人を尊重し



て、却って笑う人を笑ってやりたい。

藤村氏の体格は、信州の山国に育った誠に忍耐強きを思わせる。骨組みがしつかりして、腕も太く筋肉も緊つて、皮膚も厚く硬い、頑健な如何にも堪え忍ぶ力の強さが想像される。

背は高くはない。ずんぐりとした身体である。顔は引きしまつて、髪の毛は黒く、濃く硬く、眉も一の字に濃い。目の光りも鋭い。

其態度は如何にも静かにそして落付いて居る、余は、實際藤村氏が好きになつた。正直で真面目で、

親切で、質朴で、毫も軽跳なところがなくて、真に畏敬す可き人である。



日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館